

「アサガオ“まるごと”観察(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

子どもたちは、4メートル近い「アサガオの全身像」を前に、花のさまざまな成長過程を観察していた。鉢植えのアサガオとはちがった、ちょっとした「物珍しさ」も手伝って、夢中でスケッチする姿が見られた。



これは男児の一人の作品。葉脈の形状や、しぼんだ花の様子、これから咲く花のつぼみなどが表現されている。この男児はノートの説明文の中で以下のように書いていた。

「一つのえだから、2つの花がついています。一つが最初にさいて、もうひとつはあとからさくのが多いみたいです。でも2つともさいてないのもあるし、2つとも同じ日にさいてるのもあった。」

単に花の形状を観察するだけでなく、花のつき方の規則性を探ろうとする姿がすばらしい。



全員が一通り観察を終えた頃、アサガオの「部品」の採取を許可した。花は全員分が十分にあった。

私はほとんどの子どもは「果実」に殺到すると予想していた。果実は5~6個しかついていないので、争奪戦になりそうだった。しかし意外にも、子どもたちが一番興味を持ったのは、果実ではなく「つぼみ」だった。アサガオの「ねじれたようなつぼみ」の中がどうなっているのかを見てみたいのだという。

子どもたちは、1年生の時に全員がアサガオの栽培をしている。恐らく本校だけでなく、ほぼ全国の小学校で1年生がアサガオの栽培をしているだろう。しかし、1年生のアサガオ栽培は、「花を咲かせる」「種子ができる」といった一瞬や変化が大切で、つぼみをとって開いてみるという体験はまずない。



白っぽく見えるアサガオのつぼみも、「ねじれ」を解いていくと、赤い花卉が現れる。子どもたちは「わー、アサガオだ!」と当たり前のことを言って、歓声をあげている。



花卉を破かないように慎重に展開していく。開花し切ったアサガオではわからないが、花卉は実に巧みに折りたたまれている。アゲハのサナギの翅の折り畳みもすごいが、アサガオも巻けていない・・・いや負けていない。やがて中心部から、花の主役である「雄しべ」と「雌しべ」が出現する。